

地歴からみる 植栽計画について

1 歌川広重の描いた洗足池と古書より

歌川広重が安政三年(1856)に描いた「名所江戸百景 千束の袈裟懸松」の背景に背景林となる松やサワラ等の針葉樹と思われる樹木が確認できる。

また、大正 13 年(1924)刊行「荏原名勝」と題した案内書に洗足池について以下の記載がある。

「池は数丁四方にして東北西の三方は翠松(スツヨリ)緑樹の鬱々たる丘陵……池の出島、樅(ヒノキ)、榎(ヒノキ)、杉の蒼鬱(オウツ)たる間に一老松の枝を汀に差し伸べたるは袈裟掛松なり……傍に一宇の御松庵あり、此庵の前を池を隔てて通ずる中原街道は即ち往古の鎌倉街道なり、若し夫れ満眼の蘆荻風露(アシカサ)の秋、颯々の松籟(ソウサイ)を聴きつ願望すれば……」

※翠松（青々とした松）、蒼鬱（こんもり茂るさま）、蘆荻風露（ヨシと草本のオギ、フウロソウ）
松籟（松の梢に吹く風）

荏原名勝には洗足池についての書き出しにこのような青々とした松がこんもり茂る様子、池の出島には数種の針葉樹が、池の周囲に蘆（芦）と荻（ススキに似た草本）、フウロソウ（別名ゲンノショウコ）などの記載がみられる。また、文中に「櫻樹は東北隅に多く」といった記載もあることから、大正時代から桜の名所であった様子が伺える。



名所江戸百景 千束の袈裟懸松（一部）

このほか、文政 11 年（1828）村尾正靖著「嘉陵記行」に「千束の道しるべ」と題し、洗足池周辺を散策した際の記述があり、千束八幡神社周囲の様子を、

「いと大なる松一もとたてり、梢高くたちのびて点に参るを見る……社の四面古松たちこめ、日の影ももらず、麓も又しか也……山のたゞすまい東北に廣き池をたゞへ、南面に入江をへだて、其つゞきも岨の厓高く……」 ※岨(シヨ いしやま、けわしい) 厓(がけ)

という記述から、当時も千束八幡神社の周囲は高い松で覆われ、南側（計画地）の辺りについても険しい高低差のある地形であり、石があったのではないかと推測される。

公益社団法人洗足風致協会提供による戦前の現地の写真においても同様に針葉樹が連なる様子がうかがえる。



戦前の計画地周辺の写真（公益社団法人洗足風致協会提供）

2 植栽方針の整理

これまでの文献等を踏まえ、以下の通り植栽方針の整理を行った。

【植栽方針】

計画地周辺の特徴を踏まえて植栽計画方針を以下の通りとする。

テーマ “洗足池の背景をつくる潤いのある景勝地”

- 背景林を整備する
 - 西側宅地との境界には、常緑高木による緑の背景を創出する
〈既存のシイ、モチノキ、キンモクセイ、新植のチャボヒバ等〉
- 林床の植栽は自然な樹勢を活かした低木や、植栽地に潤いを与える品種とする。
 - 景石とのバランスをとりつつ、低木は寄せ植えにより境界部を縁取り、中心には柔らかな枝葉の低木と在来種を中心とした地被植物とする。
〈ハギ、ビョウヤナギ、アジサイ、ヤブラン、フッキソウ、ユキノシタ等の混植〉
- 景勝地としてのシークエンス景観を創出する
 - 四季の移ろいを感じるサクラやモミジ等の景観木、園路の回遊性を活かし多様な景色を展開する植栽配置
〈サクラ類、モミジ類、ツツジ類〉

